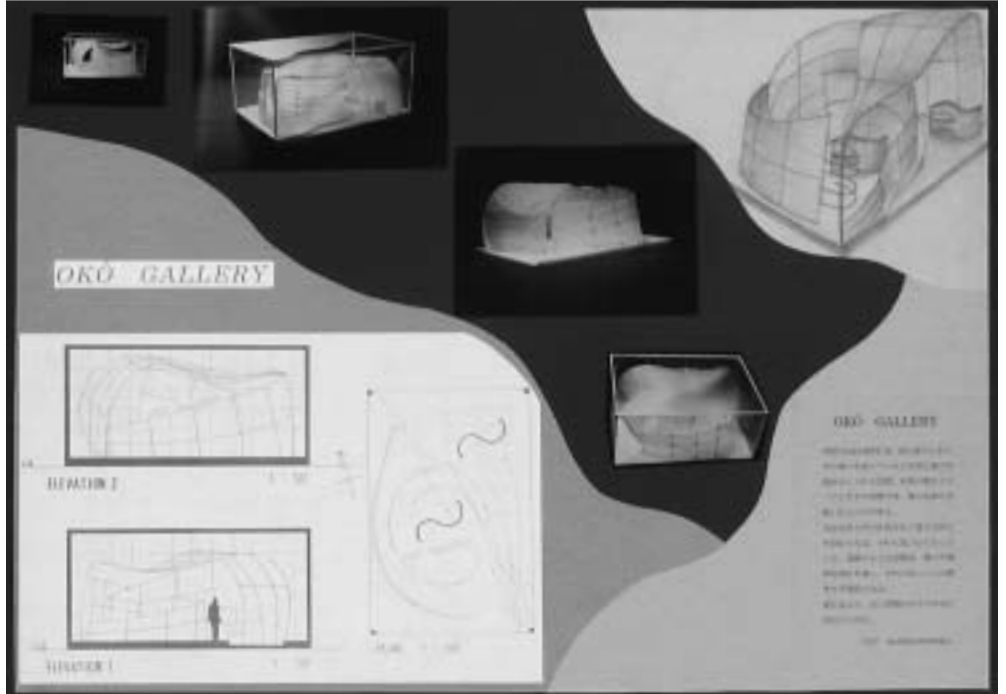


菊地 大輔



末岡 佐江子

基礎製図法

第4課題
小空間の設計

1年1組

担当＝
柳田 武
本杉 省三
田島 夏樹
田中 雅美
山崎 敬三

菊地 大輔

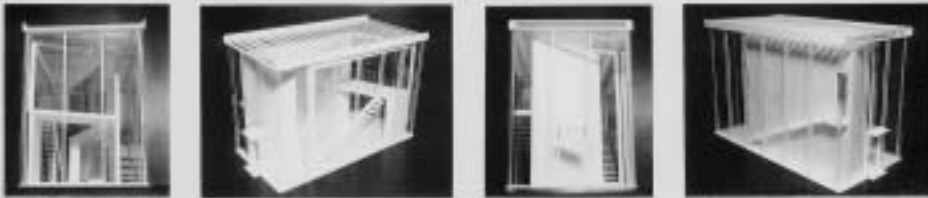
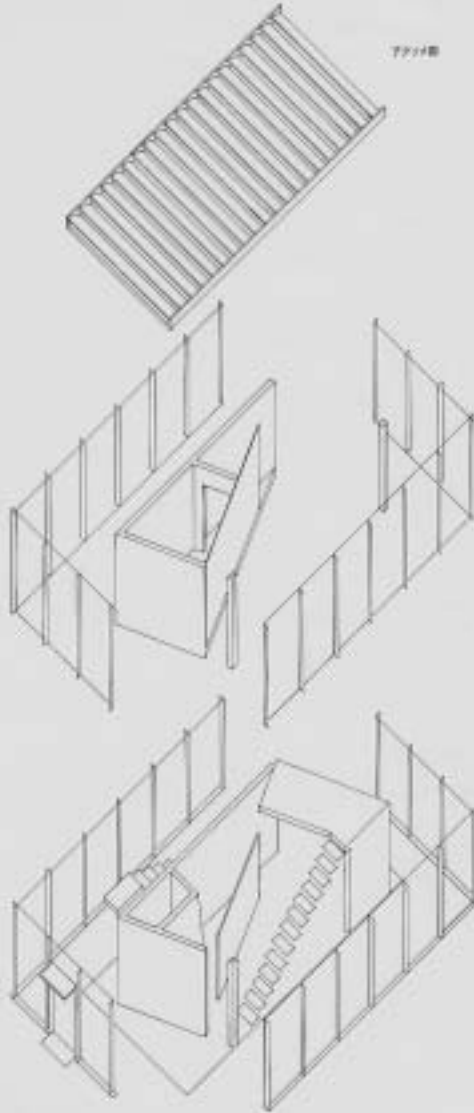
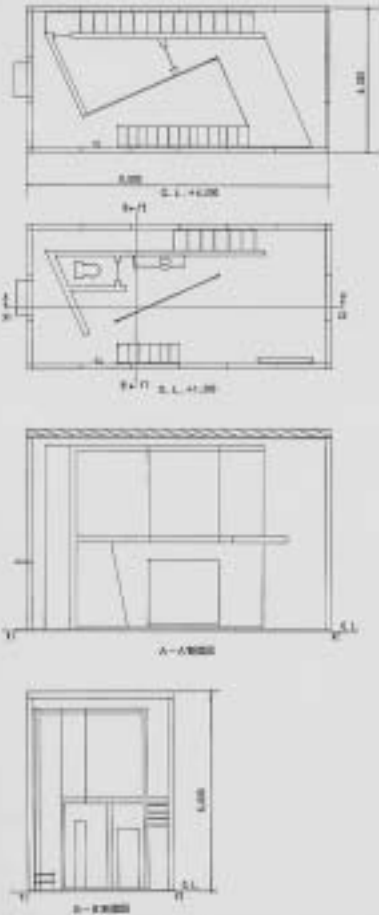
人はおおむね、物事に対して固定観念を持っている。空間に対してもそう言えるのである。この空間の中では、屋内にいるのか屋外にいるのか、それともどちらでもないのか分からなくなる。そして時に応じて全く別の色の光が刻々と射し込んでくる。ここには屋内も屋外もない、人がただその時この空間をどう思うかが重要なのである。この空間は固定観念にとらわれない人を受け入れるのである。

指導＝本杉 省三

建築に限らないことだが、ものは用途や機能を重要な手掛か

り、拠り所としてデザインされる。しかし、建築でしばしば用いられる「空間」という言葉には、用途や機能だけでは説明できない豊かさや美しさといったものが込められている。それにまず挑戦してみようというのがこの課題の主旨である。だから、僕の班では具体的な場所設定も方位も建築的な機能もなくして、できるだけ抽象的な概念や行為からテーマを建てて考えてみようということをやった。菊地君の作品は、空間を内向きのものとしてだけ考えるのではなく、外にもある、あるいは外と内のある関係の中にあるといった内外（うち・そと）との関係をテーマとして提案しているもの

建築家である家主の作業場兼、知人達を招き語らう空間を考えた。特に立地する場所を考えず、純粋に造形の楽しさだけを考え制作した。家主の作業場及びトイレなど私的な空間はRC造の箱の中に、それをガラスの箱で覆いできた空間をゲストルームとした。ガラスの箱の中に入ると目の前に5.5mのコンクリートの壁が立ちはだかる。さらに狭いゲートを通ると、奥へ向かって広がって行く空間に開放感を得られるよう想定し、制作をした。



長谷川 洋平

だ。小さな中にも6つのレベルがあることで分かるように、この直方体の輪郭の中にある外もあれば、逆に外に開かれた輪郭の内もあったり、完全に閉じた内や透明ガラスで開かれた内があったり、とにかく沢山のバリエーションによってそれらを豊かに関係付けようとしている点がこの案の魅力だろう。この他にも、楽しい作品がいっぱいあった。課題をかなり楽しみながらやっているのが分かるのも嬉しい。

末岡 佐江子

この作品は、OKO-GALLERYということ、自分がこの中で

お香を楽しむことをイメージし、和紙という素材を使ったことで、雰囲気が出せたと思う。見る人に、イメージが説明ぬきで伝わらせることができれば、それが一番建築として大切なことだと思う。失敗した点は、規定のボリュームをそのまま感じさせる構造にしてしまったことで、もっと空間の制限を感じさせないようなものにしたかった。

指導=山崎 敬三

一年生のこの段階の課題は、機能用途や場所性の読み取りに出発点を求めるのではなく、より自由に、自分を起爆点として空間を構成することが求められています。

多くの学生が自分自身の空間と規定したのに対して、末岡さんの作品は、香の煙をモチーフに、開かれた都市空間を舞台としてデザインされています。煙のもつ、たおやかな軽さ、不規則性を、空間として構築し直すことで、彼女のもつ直感が、都市に対するメッセージ性を発することになったと思います。直方体の一辺をオープンにして、内部の小口断面を露出させ、そこから自由にうねる曲線空間へ導入する一方、他の側面では透明な外皮を通して内部をかいま見せる構成になっています。迷宮感覚や、浮遊感、はかなさ、柔らかな皮膚感が、都市的な環境において魅力ある場所性をイ

メージ喚起し、末岡さんの都市に対するしなやかな感覚がよく現れていると思います。それは、一個人の直感、発想が、多くの人間に対しても一般化され得るという、建築やデザインの可能性を示しています。それは本人の思索や何度と繰り返した試行錯誤の賜物でしょう。合同講評会では、ショーケース的な感覚を越えてもっとダイナミックにとのアドバイスがりましたが、それは本人も自覚し、感じているものでもあり、更なる向上にむけて励んで欲しいところです。しかし、末岡さんの半期全体を通しての創作意欲や発想、豊かな表現力を評価したいと思います。

長谷川 洋平

建築家である家主の作業場兼、知人達を招き語らう空間を考えた。特に立地する場所を考えず、純粋に造形の楽しさだけを考え制作した。家主の作業場及びトイレなど私的な空間はRC造の箱の中に、それをガラスの箱で覆いできた空間をゲストルームとした。ガラスの箱の中に入ると目の前に5.5mのコンクリートの壁が立ちはだかる。さらに狭いゲートを通ると、奥へ向かって広がって行く空間に開放感を得られるよう想定し、制作をした。

指導=柳田 武

2年次から始まる設計製図においては、いろいろな機能や制約条件を持った「建築空間」そのものを計画・設計することが求められるが、ここではその準備段階として、立体の造形・空間構成の基礎的なトレーニングに主眼が置かれている。従って、機能・用途や敷地条件、構造的な制約といった建築的条件は、ほとんど与えられておらず、自由に空間の造形を楽しむ。反面、かえって、拠り所がつかめない、やりにくい、という一面もあったかもしれない。また、「空間の造形」といっても、単に机の上に置く置物を作るわけでもなく、美術品としての彫刻やオブジェを作るわけでもない。あくまでもそこに人間がいて、その空間の内や外を歩き回り、立ち止まり、まわりを見回したり、そこで繰り広げられる様々な人間のアクティビティとの関わりの中で空間を捉えなければならぬ。従って、小空間のボリュームとそこに関わる人間の大きさとの関係、「スケール感」が非常に重要な要素であるといえる。そのためにスタディ模型を作り、その中に入り込んだ時のイメージを確認する作業を何度も繰り返して行ってきたわけである。この作品は、建築家の作業場というハッキリした用途も想定しているが、人と空間の関わりがよく考えられており、スケールもしっかり捉えられている。また、造形的にはシンプルであっても、透明なガラスの箱に内包するコンクリートの箱といった対比も非常にうまくまとめられている。